兵庫県
大百科事典
上
あ～そ
兵庫県
大百科事典
下
た～わ

鈴木よね刀自に就いて

柳田記

去る昭和五十八年十月、こゝで生きた　この地で燃えた　日本の歴史を刻んだ　兵庫の人物の人達の中から神戸新聞社創刊八十五年記念出版として兵庫県大百科辞典が刊行された。

明治、大正、昭和へ賭け日本が激しく動いたこの時機最も熱く燃え消した姫百合にも似たる女性一輪がいた。即ち亡夫から受け継いだ直系を恵まれた才覚で大きく育てあげた鈴木よねその仁、彼女は神戸が生んだ、最高の女実業家としての明暗のひとりであった。

鈴木よね（実業家）嘉永五年（一八五二）―昭和十三年（一九三八）神戸に本店をもつ鈴木商店の経営者で初代鈴木岩治郎の未亡人として社業を受け継ぎ金子直吉・柳田冨士松・西川文蔵・高畑誠一等の才覚に支えられて商品取引を内外各地に拡大し第一次大戦で膨大なる利益をあげ、三井、三菱と並ぶ大財閥となった。最高の時には世界の各地に支店をもち直営、傍系の十余社を支配した。大正七年（一九一八）米騒動の際当時（中央区）東川崎町一の商店が焼打ちに遭ったが、第一次戦後の好景気で大商社に躍進した。然るに昭和二年の金融恐慌で倒産の憂目を見たことは全く遺憾であった。

要するに鈴木商店は(1)個人企業時代(2)合名会社鈴木商店明治三十五年（一九〇二）―大正十二年（一九二三）(3)鈴木合名会社（持株会社）株式会社鈴木商店（総合商社）時代の三つの時期に区分される。

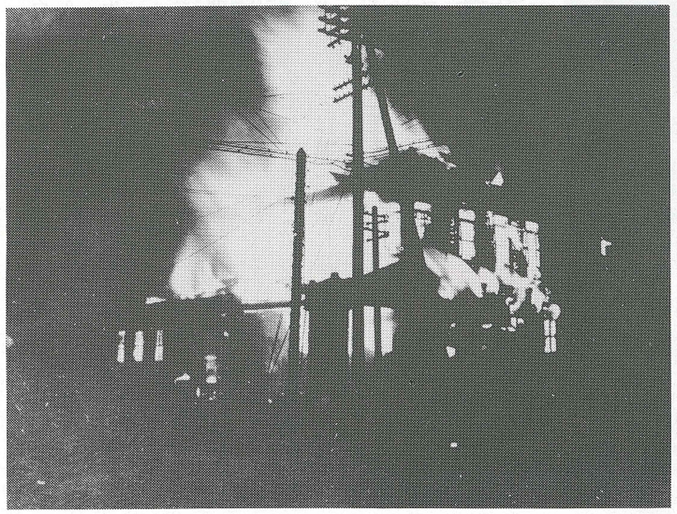
本店の立地は海岸通五を振出しに、明治十九年栄町四、明治三十七年栄町通三、大正三年東川崎町一、（元ミカドホテル建物）を経て、大正七年海岸通一と変遷した。

鈴木は貿易の草分階段に物産、鈴木時代を築いて総合商社の系流を備え物産商事時代を先行した。大正十四年現在の商社資本金のランキングで、三井物産（一億円）と株式会社鈴木商店（八十万円）は横綱クラスであったが三菱商事（千五百万円）はせいぜい小結クラスであった。大正六年三井物産を抜いて日本一の座を達成した合名会社鈴木商店の貿易年商、十五億四千万円は国力の対比に於いても未曽有のものであったが、大正財閥の花形としてのスケールもけたはずれであった。

▲東川崎町１丁目時代の鈴木商店本店。元町６丁目三越百貨店の筋向いにあったホテル・ミカドを買い取り、大正７年の米騒動の厄に遭い、焼打ちで消滅するまでここで営業した。㊦は焼け落ちる本店。

最盛期の鈴木家企業集団は鈴木合名会社（五百円）を頂点とする持株支配体制のもと六十五社五億六千万円からなり、従業員数は二万五百名を数え商社を基盤とする内外店は千五百所に及んだ。

鈴木商店の崩壊には一つのエピソードがある。台湾銀行に依る鈴木の整理が大詰を迎えた時、株式会社鈴木商店から金子直吉の退陣が条件とされていた。二代目岩治郎は、それを呑めば鈴木は救われるという土壇場に直面しても、直吉を鈴木の運命を共にする決断をあえてした。そして直吉の比類なき忠誠に報ゆる為に、母子二代に亘る「最も主家らしき主家」としての誇りと誠意に燃えたのであった。こゝに鈴木崩壊の華麗さと史上類をみないはかなさがあった。

鈴木は倒れはしたが不滅の光を育て残した事業と人材は数え切れない。日商岩井、神戸製鋼、帝人、太陽鉱工、豊年製油、石川島播磨工業、東洋高圧、日本火災、大日本製糖、日本製粉、サクラビール（サッポロ麦酒）等はその一部分とも言える。

以上述ぶるところ明治、大正、昭和三代に亘る鈴木よね刀自の関連事業、鈴木の偉大な功績を物語るものである。